

# ふるさと交友録

～伊藤 公平～ 3

「ふるさと」には、いろいろなひとがいる。この「交友録」では、月1回のペースで公平さんに“大切なひとびと”を紹介していただきます。



伊藤公平(いとうこうへい)北見市在住、郷土史研究家。私設図書館「麦の風文庫」と「野草苑があでんきたみ」主宰。平成13年～20年、みんとに「ふるさと四方山話」「ふるさと・そぞろ歩く記」を連載。

さて、その劇団河童のことである。

創立五〇年を記念した演目は旗揚げ公演の時の「三角帽子」の再々演で、これを最後に目下活動休止である。のち二人芝居も計画しようだが、これも実現しなかった。いろいろ仄聞(そくぶん)してはいるが、このまま「河童」の皿の水が干上がってしまったのは困る。

「劇団河童五〇年の記録・明日への軌跡」によると、この間地元作家石上慎さんの作品などを含めて五四作品を舞台化し、二〇八公演を行っている。その別冊「上演作品に参加した人々の名簿」にはすでに亡き人も含めて五九四名の名がみえ、同「スポンサー名簿」には八三三の商社商店の名が列記されている。

そればかりではない。どちらの名簿にも名前ののることのない、木戸銭を払って役者の演技に喜怒哀楽し、明日への活力をもたらしたという観客がどれほどいたことか。

私は劇団河童の活動再開を心待ちしている一人である。入場券二枚を買い、貧者の一灯にもならない喜捨をする以外に応援の

方法を知らない私だが、河童の五〇年が道内屈指のものであることは久しく自慢の種である。

北見文化賞を受賞した時のギヤ(扇谷)さん夫妻の喜びは、そのまま舞台作りに係わつてよかった、応援することができてよかった、客席に座ることができてよかったという大勢の人々に支えられたもので、皆も我がことのように喜んだものである。この時点で劇団河童は、北見に劇団河童ありと自慢できる市民みんなの文化財産になったのである。

舞台に立つ役者は氷山の一角でしかない。これを支えた海面下の氷塊―人・物・資金の調達と運用は一人の限界を越えるものではあるが、全てを支えきれるとは言えないまでも北見の市民はそれを持っているし、声のかかるのを待っている人も多いと思う。私もその一人である。

ギヤさんの気持ちも考えずに勝手な事を書いてしまったが、「河童」の名を惜しむがゆえに万難を排して再活動の道を探してほしいと願って書いた。ギヤさん、ごめん。